

南大分盆地の施餓鬼(二)

佐藤満洋

二 八幡田の川施餓鬼

八幡田は第一図にみるごとく大分川の南側にあり、大分川の支流七瀬川と大分川に挟まれた位置にある部落で、旧くは植田庄に属し、藩政時代は府内領に属した。

部落の川施餓鬼も起源を知る史料はないが、古くからの盆の一六日に行なわれてきた。一六日の日には午後から部落の男しが妙瑞寺前の広場集って、施餓鬼舟作りをする。しかしこの部落でも昔日の川施餓鬼の面影がうすくなってきたと古老はいう。

そこでまず同部落の釘宮安次郎氏(七六才)の話から古い川施餓鬼を復元してみたい。

部落には日蓮宗と浄土宗・天台宗とが入り混っているが、施餓鬼舟作りには天台宗を除く村中の人々が参加していた。そして日蓮宗の人々は川施餓鬼の幡作りを受持ち、浄土宗の人々は施餓鬼舟作りを受持つ習わしになっていた。それで日蓮宗の人々は、長さおおよそ二間、巾三尺の舟を作る(舟の大きさにはきまつた寸法はない)。施餓鬼舟の材料は竹と小麦稗が主であるが、古くは大分川原に共有竹林があったので竹材はそこから必要なだけ切り取り、小麦稗は部落内から出すことになっていた。

また川施餓鬼の行事には欠かすことのできないものにローソクがあるが、これは子供達が村中の家々からもらって集めることになっていた。舟作りには先節の上村と大同少異であるので参照されたい。

ところで、八幡田では舟ができあがると大分川原の柱松場の近くに竹で台を作つてその上に舟を安置する。また妙瑞寺から川原までの道に三尺余の竹を立て並べ、その上端にローソクを一本ずつ立てる万灯籠を作り、幡ができあがれば男しの仕事は終了する。

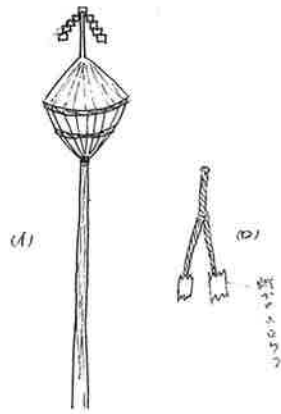
大人達が舟作りや幡作りをしている間に村の青年達は、大分川原の柱松場―施餓鬼舟を安置した場所の近く―で柱松あげ（または柱松なげ）の用意をする。まず、前年の川施餓鬼のあとで七瀬川の川底に沈めてあつた柱松用の杉木の柱（長さ七、八間）を引きあげて柱松場に運び、その頂上に竹と小麦稈とで作つた直径三尺余の鉢を取りつける。鉢は竹で骨組みを作り、それを小麦稈で囲つて杉木の柱に取りつける。

そして後で松明が投げ込まれて鉢が燃える時に、パチパチ音がして美しい火の粉が飛び散るようにするために、鉢の中によく乾いたオガクズ（ノコ切りクズ）と茶の実を入れた。それから鉢の上にトビイ（ワラで作つた覆）をかぶせ、その中心に御幣を立てる。

これらの取りつけ作業が終ると柱松が建てられる。青年達が柱松を建て終り、大人の施餓鬼舟作りや一連の作業が終ると、あとは夜になって施餓鬼の法要が始まるのを待つばかりである。この間、青年達は前年の施餓鬼が終つて以来、その年の施餓鬼の晩の柱松あげに備えて個人個人で自分の投げる松明の材料集めをしているので、各自の松明作りをする。

この地方で柱松あげに使う松明は、雨傘の開閉用のロクロと傘の頭を、破れた雨傘から取りはずしたものが最適のものとされていたようで、青年達はこのロクロにシュロなどの燃えにくい繩を別々に通して固定し、一端を結び合せて第九図(四)のような二又の松明を作つてトビイか御幣にかかりやすいようにしていた。

さて、夜の八時頃になると妙瑞寺のオッサンは寺まで餓鬼供養の読経のあと、川原の舟を安置してある所に出かけるが、そ



第9図 八幡田の柱松と投松明

の時道端に立ち並んだ万灯籠に火がつけられ、その灯の中をオッサンに従った村人の列がつづく。やがて施餓鬼舟の安置されている所にオッサンが到着し、施餓鬼の法要が行なわれる。

この間に青年達は柱松あげのため柱松場で焚火をはじめ、読経の終るのを待つ。法要が終るとこんどは柱松あげが始まるが、八幡田の柱松は近郷の名物になっていたため見物人も多く、毎年川原にはかなりの人が集っていた由である。このため青年達の柱松あげも一段と力がいはいるわけであるが、この柱松あげで一番先に火を鉢につけた者には賞品として禪が一本贈られる。柱松あげの勝者として獲得した禪をすることは青年にとっては名誉であったため、いやがうえにも柱松あげは熱気をおびていたようである。

さて、柱の頂上の鉢に火がはいると茶の実がはじけ、そのたびに鉢の中で燃えているオカクズが火の粉になって飛び散り、夜空に花火のような美しさを描き出すのである。

村人にとっては、柱松あげで誰が禪の賞品を獲得するかという期待と、柱松の下からいくつもの松明が交叉して投げあげられる美しさ、鉢に火がはいって茶の実がはじける度に火の粉が舞う美しさに酔いしれることのほかに、もっと重大な期待があった。

それは柱松の頂上の鉢が燃え落ちる時に御幣がどの方向に倒れるかということである。というのは御幣の倒れた方向はその年は疾病がなく、農作が約束されると伝えられていたからである。柱松あげにはこのような点があったが、このほかに柱松あげをすることにより村中の牛馬の安全が約束されることも信じられていた。或る年、八幡田では人手不足で柱松あげを中止したことがあったが、その年は多くの牛馬が死んだためにその翌年から再び柱松あげをするようになった、という伝説を持つて

いることから、同村と柱松あげは切り離すことのできぬものがあつたことをうかがうことができる。

さて、柱松の鉢に火がはいって中空で明々と燃えさかり、川原を明るく照らし出すとこんどは施餓鬼舟流しの行事が始まる。この舟には初盆を迎えた霊や無縁仏の霊などが乗って行くと考えられており、中空で夜空を照らす柱松の火はこの施餓鬼舟を見送る火であつたのかも知れない。

柱松あげと施餓鬼舟流しが終ると、村人はこんどは寺の前の広場集って盛大に盆踊りをする事になって来た。この盆踊りの中心になるのは「サエモン踊り」であつた由であるが、踊は夜半まで続けられ踊りつかれた人々が散会すると川施餓鬼の行事は終了するのである。

しかし青年達はそれから一週間後の盆の二三日になると、大分川原の柱松場に先の川施餓鬼の日（一六日）以来、鉢が燃え落ちて立つたままになっている杉の柱を倒して七瀬川まで運び、流れないように岸に結びつけて川に沈めて全行事を終了するのである。また幡は畑に立てると虫除になると信じられており盆の一七日に畑に立てられていた。

以上は戦前まで続けられてきた川施餓鬼の行事であるが、戦後は物資不足などもあつて万灯笼が姿を消したままになっており、さらに昭和二八（一九五三）年の大水害で七瀬川が氾濫した時に柱松用の杉柱が流失してから、柱松あげは中止されたままになっている。何回か柱松あげ復活の話も出かけたが、八幡田では牛馬を飼う農家が少くなつたことや、近年は団地造成などで山が削り取られたりして杉山がなくなり、七、八間もある杉の柱が入手困難になつたなどの理由で柱松あげは復活されずに今日に至っている。

また大分川の護岸工事のため川原の竹林がなくなり、施餓鬼舟作りの竹が少なくなつたことや、幡も昔日ほど立てられなくなつた等の理由から今日では小規模な施餓鬼舟が作つて流されており、妙瑞寺のオッサンの餓鬼法要が行なわれるだけで、わずかに川施餓鬼の余命を保っている。

三 光吉の川施餓鬼

光吉部落は第一図にみるごとく大分川が支流の七瀬川と合流して北上をはじめた付近の南側に位置する部落で、古くは植田莊光吉名の存在したと考えられる部落である。そして藩政時代には府内藩に属した。

この部落でも川施餓鬼の起源を知ることができないが古くから盛大に行なわれてきた。しかし昭和三十一年（一九五九）頃から施餓鬼舟流しは行なわれなくなっている。そこで部落の古老芦刈邦彦氏（七九才）から聞いた光吉部落の川施餓鬼行事について紹介してみよう。

光吉の川施餓鬼は「カワセガケ」とも訛って呼ばれたりしているが、盆の一六日に行なわれ、村中の先祖や無縁仏の供養のための行事と考えられていた。部落は古くから町・中・下の三組に分かれているが、川施餓鬼の日には町組（肥後細川氏の参勤交代道路に当たっていた地域）は古くから施餓鬼舟作りをすることになっていた。そして中組と下組は万灯籠と幡作りをすることになっていた。ここも上村や八幡田と同様に舟の材料は竹と小麦稗であるが、竹は大分川辺の共有竹林から切り出し、小麦稗は各農家から出し合せることになっていた。

盆の一六日の午後になると村中の男しは大分川原に出て、町組は施餓鬼舟作りを、中組と下組は幡と万灯籠作りをしていた。（施餓鬼舟作りは上村と大同少異の由であるので省略する。）

八幡田では三尺余の竹棒を道路わきに立てたものを万灯籠と呼んでいたが、光吉では前述した上村の「クモデ」を万灯籠と呼び、三〇〜四〇個作ってその上にローソクを立てる。ローソクは原則として世話人が一斤出し、あとは各戸から一本ずつ出すことになっていた由である。

ところで施餓鬼舟をはじめ幡や万灯籠ができあがると、川原に竹で作った台の上に舟を安置し、周囲に幡が立ち並び万灯籠が並べられると川施餓鬼の準備は完了である。

一方、各家庭ではカンカラの葉で包んだ小麦モチや米粉モチを作ったり、ヤセウマを作って川施餓鬼を祝っていたようであ

さて、諸準備が終り夕方の六時半頃になると吉祥寺からオッサンが川原に出て餓鬼法要が始まる。この時、施餓鬼舟には村人の手で山の幸が餓鬼に供えるために積み込まれ、さらに古い位牌や古くなった仏具など家庭に置いたままでは粗末になると考えられるものはみな舟に積み込まれる。

万灯笼籠に明々と灯がともされオッサンの読経が流れだすと、村人は万灯笼籠を次々に川に流し始める。三〇〇四〇個の万灯笼籠が川面に灯の行列を作り、その灯の行列の最後を施餓鬼舟が川をくだる様は、まったく極楽浄土に通ずる川のような神秘さをも出し出していた由である。

こうして施餓鬼の法要が終ると村人は施餓鬼幡の奪い合い（争いではない）を始める。これは、幡を田畑に立てれば虫除けになると信じられていたからで、是非とも一本はほしかつたのである。

幡の持ち主がそれぞれ決まると、こんどは村人は川原に踊りの輪を作って盆踊りを始めるのである。踊りは主として「サエモン踊り」であったという。二〜三時間盆踊りが続けられ、人々が踊りつかれて家路についた時に川施餓鬼行事の全部が終了するのである。

各家庭では施餓鬼行事が終って帰ってから小麦餅か米粉餅、またはヤセウマを夜食に食べる準備をしていたようである。以上が光吉村に古くから伝えられてきた川施餓鬼の行事であるが、大分川の護岸工事が行なわれて川原に出にくくなって施

餓鬼舟の流し場がなくなったため、昭和三二年頃から舟流しを中心とする一連の行事が中止になり、ただ吉祥寺での施餓鬼の法要が営まれているだけである。

四 上宗方の川施餓鬼

上宗方は大分川の南側にある部落で、ここも古くは植田荘に属し、藩政時代には府内領であった。

この上宗方は古くから盆の一七日に川施餓鬼（またはオセガケ）が行なわれていたが、大分川の護岸工事の際に川原にあった共有竹林がなくなり、また団地造成で山が切り開かれて竹や茅がなくなつたため、旧様式の施餓鬼舟ができなくなり、昭和四四年（一九六九）年には、大工に頼んで小さな木の舟を作って、流すという新しいものに変わっている。そこで旧来の上宗方の川施餓鬼行事を同村の古老安東繁彦氏（八八才）の話により復元してみたい。

上宗方は通常、東組・上組・櫛山組の三組に分かれているが、施餓鬼舟作りは三組が交代で三年に一度ずつ当番に当たっていた。当番の組は盆の一七日の午後、竹や茅を切つて来て、氏神社の木蔭に集り施餓鬼舟作りをしていた。この村では舟作りの材料に茅が使われているのが注目される。

舟の大きさにはきまりはなかつたようであるが、長さは九尺〜二間位、舟巾は三尺前後で、作り方は上村の場合と大同少異であるが、小麦稗のかわりにここでは茅が使われている。

舟作りと平行して囃作りをしたり、灯籠流し用の灯籠（上村のクモデと同じもの）を茅で三〇個ほど作つて、ローソク立て用の竹の串をさしたり、同部落の大楽寺から大分川原（現在の明積橋の下）までの道路に三尺余の竹を立て並べてローソクを上立てた万灯籠が用意される。施餓鬼舟ができると大楽寺の境内に運んで安置し、帆や囃の取りつけが行なわれる。一方、村の青年達は麦または小麦を各家からとり集めて、それをローソクや紙類の購入費にあてたり、寺への謝礼にあてた。もし不足の場合は部落の会計から援助されるしくみになっていた。

諸準備が終ると村人は夕暮を待つわけであるが、夜のとばりがおきる頃から大楽寺では無縁仏を供養する法要が始まり、そのあと村人よつてかつかつがれた施餓鬼舟は万灯籠の立ち並ぶ道を通つて大分川原に運ばれる。

川原で餓鬼供養が行なわれ、施餓鬼舟と灯籠が夜の川面に美しい灯の行列を作つて流される頃になると、上宗方側の川原はもちろんのこと、対岸の奥小路部落（現明積）側の岸にも見物の人がおしかけていたという。上宗方と奥小路との間に明積橋が架設されてからは、施餓鬼舟流し（灯籠流しとも呼んでいた）の時刻には橋の上が一時的に混雑する程の人出があつた由で

ある。

さて、灯籠流しが終ると人々は大衆寺に集って盆踊りを夜半頃まで行なっていた。

青年達はこの日のために田植が終つてから毎晩のように集つて、「サエモン踊り」などの盆踊り歌の練習をしているので、時には夜半過ぎまでも唄い、踊ることもあったという。

この施餓鬼行事は盆の期間中であるため、特にこの日のための御馳走はないが、施餓鬼と小麦餅は切り離すことのできないものであったようである。

以上が、古くから行なわれてきた上宗方の川施餓鬼行事であるが、現在では前述のような理由で竹と茅が入手困難になり、施餓鬼舟作りは昭和四三（一九六八）年には中止され、翌年には木製の舟に装を変えて施餓鬼舟流しが行なわれたという。

五 下宗方の川施餓鬼

下宗方はその名の通り上宗方の下隣りの部落で、古くは植田荘に属し、藩政時代には府内藩領であった。そして古来同部落には植田地方から大分川をへだてた対岸の任限郷畑中に渡る宮カ瀬の渡し場があり、交通の要所になっていた。

この下宗方でも古くから伝承されている川施餓鬼行事をみる事ができる。

そこで同部落大念寺の釘宮心教氏（五五才）に川施餓鬼行事について話してもらったものを紹介しよう。

他部落同様その起源を知ることとはできないが、古くは盆の一七日に行なわれていたという。しかし第二次大戦中、植田村の慰霊祭が一七日に行なわれることになったため、同村の川施餓鬼は一六日に変更され今日に至っている。

同部落は通常、奥組・西組・南組・新屋敷組の四組に分けられており、この四組が輪番制で、四年に一度ずつ施餓鬼舟作りなどの作業を担当することになっている。ローンクをはじめ紙類などの購入費は先述の村々と異り、この村ではすべて村会計から出され、年末の決算日（オトヨリ）に他の諸支出と合せて精算されることになっている。そこで当番の組は盆の一六日に

は朝から大念寺の境内に集って施餓鬼舟作りなど諸作業を行なうのである。

材料の竹は、以前は大分川原にあった共有竹林から切り出していたが、大分川の護岸工事のため竹林がなくなつたので、現在では個人の竹林から切り出している。小麦稗は当番の組内の各家から出し合せて、長さ一間前後、巾三尺余の施餓鬼舟を作っている。(舟の作り方は上村と大同少異の由であるので省略する。)

そして夜になると大分川原の柱松場と呼ばれる処に施餓鬼舟を運び、そこで村中の初盆を迎えた霊をはじめ、先祖の霊や無縁仏の霊などを見送る川施餓鬼の法要が営まれる。その時舟には仏具の古くなって使用しなくなったものや、白木の位牌などを積み込み、舟とともに流す。しかし実際にはこれらのものは一応舟に積み込んで法要をしたあとで別に川原で経をあげて焼き、その灰を施餓鬼舟に積んで舟と共に流すようである。

以上が古来から行なわれている下宗方の川施餓鬼の施餓鬼舟流しであるが、古くは前述の八幡田の場合と同様に柱松あげが行なわれていたという。そのため柱松場なる地名が川原に残っているわけであるが、この柱松あげは第二次大戦中に中止して以来復興されないまま今日に至っている。

また古くは川施餓鬼行事のあと、村中の人々が盆踊りをしていたがこれも行なわれなくなっており、今日では施餓鬼舟流しの行事が残っているだけである。

六 奥小路の御施餓鬼

奥小路部落は大分川の北側にあり、上宗方の対岸の部落であるが、後に奥田とも呼ばれるようになったが、現在では明礮と改称されている。

この奥小路は古くは荏隈郷に属し、藩政時代には府内領であった。

この部落ではオセガキと呼ばれる行事は盆の二一日の夜行なわれるが、施餓鬼舟流しは昔から行なわれていなかったよう

ある。

同村の河野不二夫氏（五九才）によると、盆の二一日の夜は奥小路の人々は村内の虚空蔵菩薩を本尊とする観音堂に集り、短冊様に切った色紙をつるした注連縄を張りめぐらし、オッサンを招いて村中の先祖や無縁仏を供養する餓鬼供養を行なう習わしになっている。そしてその供養が終ると村中の人々が観音堂前の広場で盆踊りをしていた由である。盆踊りは大正末期頃まで行なっていたが、今日では餓鬼供養が行なわれているだけである。

ところで餓鬼供養の時に作った短冊様の色紙は、供養のあとは各家庭に持ち帰って田圃に立てると虫除けになると伝えられており、この風習は今日も続いているようである。

七 豊饒の御施餓鬼

豊饒は奥田村の東北隣の部落で、古くは在隈郷に属し、中世における豊饒氏の苗字の地ではないかと考えられるが、藩政時代には府内領に属していた。

この部落の御施餓鬼行事は盆の二四日に行なわれており、この近郷では次に述べる畑中の施餓鬼とともに最も遅い施餓鬼行事となっている。

豊饒の施餓鬼は施餓鬼舟流しが行なわれており、これを精霊流しと呼んでいるが、先述来の他部落のものとは趣が違っているので、生野彫氏（七八才）と生野森太氏（七〇才）から伺ったものを紹介してみよう。

部落には火防の神として村人から信仰されている地藏様（本尊は釈迦如来）と呼ばれる御堂が部落の中ほどにあるが、ここは無住であるため上村の聖養寺のオッサンを招いて、盆の二四日にセカケ（施餓鬼）を行なっている。

盆の二四日の午後になると子供のいる家ではそれぞれの家ごとに施餓鬼舟作りをする。舟の大きさは長さが四尺程度であまり大きなものではない。舟作りの材料は竹と小麦桿であるが、舟ができあがると次は舟に乗せる見立細工作りが行なわれる。

材料は茄子や唐黍のカモジ（カムロ）など身近にあるものが使われ、作品にはお軽勘平とか忠臣蔵など人々によく知られているものが比較的多かったようである。施餓鬼舟作りが終ると人々は夕食後の餓鬼法要を待つわけである。

一方、女ごしは各家庭で小麦モチやヤセウマを作って施餓鬼を祝う習わしになっていた由で、以前はヤセウマを食べなければ盆がきたような気がしなかったという。

夕食後、地蔵堂で餓鬼供養が行なわれ、先祖の霊や無縁仏の霊を慰めたあと、地蔵堂の前を流れる水路で精霊流し（施餓鬼舟流し）が始められるのである。精霊流しといっても先述の部落のごとく完全に流してしまうのではなく、各家庭で作った舟

に地蔵堂でお経をあげてもらった後で舟のローソクに灯をつけて乗せてある見立細工がよく見えるようにし、地蔵堂の前を流れる水路の岸に施餓鬼舟をつなぐのである。以前は子供のいる家からは必ず舟が出されていたので十隻をくだるような年はなかったようである。

地蔵堂での供養のあと村人は水路の水面にローソクの光を美しく写して並べられた施餓鬼舟に乗せてある見立細工をみて歩くのである。見立細工は賞のあるロンクールではないが、人々が感心して見いたり感歎の声をしたりしているのを見聞きすることは、作者にとってうれしいもので、来年は何を作るうかと施餓鬼の夜からひそかに計画をめぐらすのも楽しかった由である。

人々が施餓鬼舟に乗った見立細工を見てまわるのが、先述の村々で施餓鬼舟流しに相当するようで、一通り見物が終ると盆踊りが行



地蔵堂の豊饒の建物が左手前、餓鬼舟が浮べられた水路の右側が施餓鬼舟流しの小路

われていた。

盆踊りが始まるのはだいたい午後九時頃からだったようであるが、時としては夜半を過ぎて夜明近くまで踊り続けられることもあった由である。また岸につながれていた施餓鬼舟は行事の翌日、子供達が引き揚げて玩具にして遊んでいたという。

このような施餓鬼行事も第二次大戦以後はまず盆踊りが中止されており、さらに近年は急激に戸数が増加し、以前は清流の流れていた水路も下水が流れこみ、汚れが目立つようになってきたため施餓鬼舟流しのできる水でなくなつたようで、年々舟の数が少なくなっていたが、今年（昭和四四年）の施餓鬼の日には一隻もみられなかったという。

餓鬼供養は今後も続けて行なわれるであろうか、来年ははたして施餓鬼舟を作る家があるだろうかと古老達は淋しがっている。

八 畑中の御施餓鬼

畑中も古くは在限郷に属していたが、大分川を挟んで対岸の下宗方と在限郷を結ぶ渡し場があり、早くから開けた村でも薩政時代は府内領に属した。

この部落も盆の二四日に施餓鬼の行事が古くから行なわれている。元来この部落の施餓鬼行事は施餓鬼舟を流さない習わしであつたようである。同村の古老秦義夫氏（七六才）の話によると、同氏が物心ついて以来、二、三回他部落の例に習つて施餓鬼舟を大分川に流したことがあつた由であるが、その後は本来の姿に帰つて施餓鬼舟流しは行なわれていないという。

部落に伝えられている施餓鬼の伝説によると、昔、部落に辻地蔵（延命地蔵）がまつられていたが、ある時旅の僧が通りかかり、この村には死後一度もお経の声を聞いていない無縁仏の霊がたくさんいるので供養しなければいけない、と村人を説いて、辻地蔵の祭日である盆の二四日に地蔵講をするようになった。そして地蔵講員が中心になつて施餓鬼供養をするようになったという。

このようにしていつの頃からか盆の二四日の夜、辻地蔵の場所に建立された寺（現在は天台宗十輪寺となっている）に地蔵講員が集つて、最大の御馳走である「油揚げ」を食べ、そして同寺で餓鬼供養をする習わしになっている。

寺の本堂に施餓鬼棚が飾られ、その棚の上にその年の初盆を迎えた人々の位牌をはじめ無縁仏の位牌を安置し、棚の周囲にオフダを貼つて供養が行なわれる。そして引続いて本堂で饅頭まきが終るとこんどは寺の境内で盆踊りが行なわれる。盆の二四日の盆踊りといえば、隣りの豊饒の盆踊りとともに近郷では遅い盆踊りであつたために、近郷の青年達はその年の盆踊りの踊おさめだとして、かなり遠方からも踊りに来ていた由で、畑中の盆踊りは近郷の名物になつていたという。

以上が畑中の施餓鬼行事であるが、施餓鬼棚の周囲に貼つてあつたオフダは地蔵講の講員がそれぞれ持ち帰つて大根畑に立てる。そうすると大根には虫がつかないといわれており、法要のあとはそのオフダが虫除けフダになつていたようである。

ところで今日では盆踊りはもちろん、本堂での饅頭まきの行事も行なわれなくなつており、部落の世話人が盆の二四日の晩に十輪寺に集つて供養をするだけで、昔日に比べれば簡素な餓鬼供養が行なわれているだけである。

九 施餓鬼の種類

以上、南大分盆地における施餓鬼行事について紹介したが、まずこの行事が行なわれる時期をみると、上村の場合は土用の三日めであるがこれは旧暦の土用の三日であり、たいてい旧暦の七月二〇日前後になるし、他の部落の場合は盆（旧暦の七月）の一日から二四日までの間に行なわれていること、現在は月遅れの八月の盆に行なつている。および行事の内容から考へて盆行事の一つであることがわかる。

そこで、各村の古老から聞いた行事のそもそもの目的をまとめてみると、全部の部落で共通していることは「無縁仏の供養が加わつているのである。本稿ではふれ得なかつたが大分川ぞいの質来では「川で亡くなった人の霊を供養する」と考へているようであるが、畑中に伝わる伝説は「死後一度もお経の声を聞いたことのない無縁仏の供養」をするために地蔵講が始まり、

施餓鬼が始まったことを伝えていることから考えて、そもその目的は先祖の霊を迎え送りする盆行事に合せて無縁仏を供養することであつたことを教えているようである。

下宗方の大念寺住職釘宮心教氏から「ある時（昔）木蓮尊者が、亡くなった尊者の母親がどのような所にいるだろうかとお釈迦様にみてもらった処、餓鬼の世界にいて苦しんでいることがわかつた。そこで母親を助ける方法はないものかとお釈迦様にお尋ねしたところ、みんなの力を借りて供養をし、参集した人々に御馳走をすることが唯一の方法であることを教えられた」という。それで仏教では法要のあとおときの膳が用意されるのである旨をお伺いしたが、餓鬼の世界にいる無縁仏を供養し御馳走をするのが、畑中では「油揚げ飯」や本堂での「饅頭まき」になり、上村では「会食」や「直会」という型に変化しているのではないだろうか。またほとんどの部落では各家庭ごとに小麦餅や米粉餅、あるいはヤセウマを作つて施餓鬼を祝うというのは、実は餓鬼に供養することが本来の姿ではなかつたかと考えられるのである。

それで施餓鬼は字の意味からしても、右のような観点からしても無縁仏の供養が本来の目的であつたとみることができよう。それにいつからか先祖の供養や初盆を迎えた霊の供養、さらには牛馬の霊の供養が加わつたものであるう。

そこで南大分盆地における施餓鬼行事をその行事の内容から分類してみると次の三形式に分類することができる（第一表参照）。その一は施餓鬼舟を流す上村をはじめ下宗方までの五部落で、これをⅠ類と仮称しておく。その二は小型の施餓鬼舟を作るが完全に流さない豊饒があげられるのでこれをⅡ類としておく。その三は全然施餓鬼舟を作らない奥小路と畑中で、これをⅢ類と仮称することにする。

まずⅠ類についてみると、施餓鬼舟作りは五部落とも部落を何組かに分けて輪番制に当番をきめているが、これは戸数が増加したためで本来の姿は村中の人々、すなはち共同体全体の力で作つていたのではないだろうか。上村の場合についてみると行列を途中で待ち伏せて施餓鬼舟を奪い取るのは村中の青年である。さらに最後の盆踊りをするのも部落全体の人々であることから考えると、この施餓鬼行事には集団的要素がみられるのである。さらに、他の部落の場合についてもⅠ類からⅢ類まで

(第1表) 南大分盆地の施餓鬼行事

分類	番号	村名	実施日	目的	施餓鬼舟	乗せるもの	嘴・オフダ	後日の用途	火			盆	御馳走	その他	備考	
									灯籠	立籠	柱					
I	1	上村	土用3日	牛馬無縁供養	◎	馬の鞍 餓鬼の食	○	虫除	○	◎	○	小麦モチ	ニギワイ		現在快楽のみ	
	2	八幡田	盆16日	初盆の霊	◎		○		○		○	小麦モチ				
	3	光吉	"16日	先祖無縁	○	古い位牌・仏具・山の幸	○	虫除	○		○	小麦モチ				◎
	4	上宗方	"17日	無縁	◎		○		○		○	小麦モチ				
II	5	下宗方	"(17日) 16日	初盆の霊 先祖無縁	◎	白木の位牌 古い仏具				○	○	ヤセウマ				
	6	豊饒	"24日	先祖無縁	○	見立細工					○	小麦モチ			◎	
III	7	奥小路	"21日	先祖無縁			◎	虫除			○	ヤセウマ			◎	
	8	畑中	"24日	先祖無縁			◎	虫除			○	油揚げ飯	マンジニ ウマ まき		◎	

(註) ① ◎は現在行なわれているもの。
② 下宗方の(17日)は古い施餓鬼日を示す。

全部の部落で盆踊りをしており、これには部落の人がほとんど参加していたし、八幡田や下宗方の柱松あげも同様なことがいえるのである。

このように施餓鬼行事に集団的要素がみられるのは、無縁仏の害を村という共同体の力で除くことにあつたからではないだろうか。本県の直入郡地方には部落ごとに毎年正月に病除祭をして、村人が村境の道路上に注連縄を張り渡して自分達の部落には悪病がはいってこないようにする行事がある。これは人の目に見えない恐いものに対しては村という集団であつたことが考えられていたことを示すものと考えられるが、施餓鬼行事に集団的要素がみられるのもこれと同様の理由によるものであろう。

ところで施餓鬼舟流しには上村では松明をともしてにぎにぎしく騒ぎ、舟を流す時にはクモデにローソクを二本ずつともし、村内の牛馬の数だけ流しており、八幡田と上宗方では寺から川原までの道路に万灯籠をともし、八幡田と下宗方では川原（柱松場）で柱松をあげこども大いににぎわつた後に舟を流している。また光吉でも施餓鬼舟と万灯籠を流し川面に灯の列を作るなど、この行事は火が一つの主役をつとめていることが注目される。

このように火を焚く風習は広く全国的に見られるものであるが、柳田国男先生は「魂送りの時は御先祖の霊以外に、ほかの多くの無縁仏がいると思うので殊に灯火を賑やかにして送る①」風習のあつたことを述べておられることと考え合せると、右の村々の場合もこの例にもれないであらう。

また行事の中で注目されることは施餓鬼に使つた幡またはオフダを田畑に立てると虫（または病気）がつかないと考えている村があり、上村では施餓鬼舟と松明が粟畑の中を走りまわっているし、八幡田では柱松の上に立てた御幣の倒れた方は豊作が約束されると考えることによる虫送りの行事も兼ねていたことが想像されるのである。

さらに上村では馬施餓鬼の別名があり、クモデを村内の牛馬の数だけ作つて流したり、八幡田では柱松あげをすることによつて村内の牛馬の安全が約束されると考えられていたことなども、無縁仏の災いを取り除くことにあつたと考えられ、施餓鬼

行事は広汎な目的をもっていたことがわかるのである。

そしてⅡ類の豊饒の施餓鬼舟作りは子供のある家だけが作るの、古い思想の中に「児童が精霊の代理をつとめる②」という考えがあったことにより餓鬼の霊を慰めるために子供の親が舟を作り、見立細工などを舟に乗せたりするようになったのではないだろうか。上村では子供が施餓鬼の幡をかついたり、戸主以前の青年が施餓鬼舟を奪つて畑や村中を走りまわるのは無縁仏Ⅱ餓鬼の代理として暴れ、それによつて無縁仏Ⅱ餓鬼の災を封ずる願いがこめられていたのである。

ところで、Ⅲ類に分類した奥小路と畑中とともに大分川ぞいでありながら施餓鬼舟流しを行なつておらず、他の村々に比べるといたつて静かな施餓鬼行事であるのはなぜだろうか。類例が少くして推論することは無謀のそしりをまぬがれないが、施餓鬼本来の目的は先述のごとく無縁仏の供養であつたとするならば、特別に騒ぐ必要はないわけであり、このⅢ類の型があるいは古い施餓鬼の姿を伝えているのである。(あくまでも仮説であるが)

それでこのⅢ類の本来の姿は法要のあと村中の人々が盆踊りをして無縁仏Ⅱ餓鬼を送り出すと考えられていたのかも知れない。

ところがこの施餓鬼とは別に、「竿の頭に高燈籠を揚げ、または大きな柱松明に火を焚くことが盆と正月の祭の中心になっていたことがあり、夜空に照りかがやくのを見て祖霊の道しるべのごとく考える③」思想が伝えられ、施餓鬼行事にⅠ類の行事のような万灯籠や柱松あげ・松明などの火の行事が持ちこまれ、餓鬼を舟で送り出すことが考えられたのであろう。

そしてその後に祭を一段とにぎやかにするべく幡が登場したり、上村のように青年が施餓鬼舟を奪つて餓鬼の代理として村や畑を走りまわるにぎわいが派生し、また光吉や下宗方のごとく古い位牌や古い仏具を施餓鬼舟に積んで流す考え方が比較的新しい時代に加わつて今日に至つてるように考えられる。

以上のように考えてくると、Ⅲ類の行事が南大分盆地中心部での施餓鬼の比較的古い姿を伝えるものようであり、Ⅰ類やⅡ類の行事は新しい要素が加わつたものであるように考えられる。

ところで餓鬼法要および施餓鬼舟流しの行事のあとで行なわれていた盆踊りについてであるが、盆踊りは「盆に招かれてくる精霊を慰め、またこれを送る踊り④」と考えられているが、Ⅲ類の村での盆踊りは無縁仏に餓鬼を送るためのものと考えられるのに対して、Ⅰ類とⅡ類の村々の盆踊りは施餓鬼舟流しを終わった後の踊りであるので、Ⅲ類の村での盆踊りとは多少意味が異なるように考えられるのである。

施餓鬼舟流しおよび火の行事は先述のごとく、餓鬼法要と踊りの間に新たに加わった行事であるが、人々の考え方としてはⅠ類とⅡ類の村では「無縁仏に餓鬼送り」という主要行事は施餓鬼舟流しで完了するのである。とするとその後の盆踊りは本来の無縁仏に餓鬼を送る目的とは異なったものになっていたのではないだろうか。

古くから施餓鬼の夜踊ってきたから理屈ぬきで踊り継がれてきたが、Ⅰ類とⅡ類の村での盆踊りは、人々の考え方としては無事に無縁仏に餓鬼送りが終わったという安堵の気持の強い、新しい意味を持った盆踊りになっていたのでないだろうか。各部落（町内会）では戦後の混乱期を過ぎてから盆踊りを復活させているようであるが、施餓鬼とは無関係の別の日に行なわれており、Ⅰ類、Ⅱ類の村々では施餓鬼舟流しのみが残っているのである。

施餓鬼舟流しの行事後の盆踊りが行なわれなくなっていることは、このことを証明しているように考えられるのである。

あとがき

以上、南大分盆地の中心部に伝えられている施餓鬼行事について述べてきたが、大分県内をみると大分川上・中流域およびその支流域の賀来・石城・向ノ原・野津原のほかと同種の精霊（舟）流しが今日まで続けられている所としては竹田盆地の稲葉川での精霊流し、宇佐郡長州の精霊流しなどが有名であり、また虫送りの「火の祭」としては大野郡三重町下赤嶺の「八朔まつり」や同郡緒方町の「ござい」などがあり、さらに県内各地では「柱松あげ（または柱松投げ）」等がみられる。

このようにみてみると大分県内にも数多くの同系統の行事が伝えられていることがわかる。しかし従来は個々の行事につい

ての調査は行なわれたものがあるが、それらの総合的な比較研究はまだ行なわれていないのである。

筆者は南大分盆地における施餓鬼行事を調査してみ、比較的古いであろうと考えられる一つの型を仮説として考えてみたが、この仮説をもとにして今後より広汎な行事の調査研究を進めてみたいと考えている次第である。

(註)

- ① 柳田国男著「火の昔」
- ② 「民俗学辞典」盆行事の項。
- ③ 柳田国男著「先祖の話」
- ④ 「民俗学辞典」盆踊りの項。